



小山実稚恵の新シリーズ

大阪新音コンサート

「ベートーヴェン、そして…」



(C) ND CHOW

シリーズは全6回(3年)で構成

■ 第1回 2019年6月23日 14:00 《敬愛の歌》

ベートーヴェン×シューベルト

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第28番

シューベルト：ピアノ・ソナタ第13番

シューベルト：幻想曲 作品90・作品142より

いずみホール S 5000円・A 4500円(全席指定)

■ 第2回 2019年11月24日 14:00 《決意表明》

ベートーヴェン×モーツァルト

モーツァルト：デュポールの主題による変奏曲

モーツァルト：ピアノ・ソナタ第13番

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番

「ハンマークラヴィア」

いずみホール S 5000円・A 4500円(全席指定)

*「第1回・第2回セット券」は6000円+大阪新音会費

大阪新音でのみ取り扱っています

第1回券／1・2回セット券 発売中

■ 第3回 2020年6月(予定) 《知情意の奇跡》

ベートーヴェン×バッハ

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第30番

バッハ：ゴルトベルク変奏曲

■ 第4回 2020年11月(予定) 《本能と熟成》

ベートーヴェン！

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番「皇帝」

ほか(詳細は検討中)

■ 第5回 2021年6月(予定) 《結晶体》

ベートーヴェン×バッハ×モーツァルト

ベートーヴェン：6つのバガテル

バッハ：半音階的幻想曲とフーガ

モーツァルト：幻想曲(二短調 K.903)

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番

■ 第6回 2021年11月(予定) 《異次元へ》

ベートーヴェン×シューベルト

シューベルト：ピアノ・ソナタ第19番

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第32番

(2019/05/01)



小山実稚恵 「ベートーヴェン、そして…」シリーズ公演だより

大阪新音
☎ 06-6926-4888

人間の未来へ希望を託したベートーヴェン作品

小山実稚恵さんの大ファンの春子と、西欧音楽の歴史に関心をもつ秋子の、大阪の女子学生2人が話しています。

後期ピアノ・ソナタをシリーズで

春子 小山実稚恵さんが「ベートーヴェン、そして…」というピアノシリーズを、大阪で6月から始めるんよ。
秋子 そやね。小山実稚恵さんというショパンやラフマニノフの演奏家と思っただけで、こんどはベートーヴェンのソナタ、それも後期作品を全6回・3年かけて弾きはるの？、私も興味あるわ。

春子 けど、なんでベートーヴェンの後期作品なんやろ。

秋子 それだけベートーヴェンが魅力的やから！ 何しろ、作品はドラマチックで人間味が感じられる。『不滅の恋人への手紙』って聞いたことあるでしょ。貴族の娘とも数々の恋愛をしたけど、身分違いが理由で実らなかった。ベートーヴェンはきっと、人間としての不条理を強く思ったに違いない。



あらへん。「もっと自由を」というのはベートーヴェンにとって切実な願いだったと私は考えてるんよ。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタは32曲あって、みんなそれぞれ性格が違い、聴きどころがあるけれど、後期の28番から32番には「人間」というのはこうありたい「人間」というのはこうありたい「人間」というのの思い、希望が込められているのやないかい。

春子 ベートーヴェンはバッハと

モーツァルトから大きな影響を受けた。一所懸命、お手本や参考にした訳。逆にシューベルトは、ベートーヴェンから影響を受け、尊敬し、目標にした。それら3人の音楽家の作品を併せて演奏し、相互の響き合いを表現したいというのが「ベートーヴェン、そして…」シリーズの動機って、小山さんが

どこかで言うてはった。

秋子 そうなん？ 6月の第1回目はシューベルトとの組み合わせやね。シューベルトは『野ばら』や『魔王』とか、歌曲王として有名だけど、こんど演奏されるピアノ・ソナタ第



13番なんかの、ほんまに美しい器楽曲もたくさん作ってはる。

シューベルトは貧乏生活の中でも、工面してベートーヴェンの演奏会に通ったらしいワ。一度、自作のピアノ作品を持って会いに行っただけど、留守で会えなかった。ベートーヴェンの最期の頃、病床へ見舞いに行っただけど、言葉も交わされへんかった。ベートーヴェンが亡くなった次の年(1828年)に、シューベルトも短い人生を終えたけど、遺言は「ベートーヴェンの隣に葬って」ということやった…。

春子 そこまでベートーヴェンに心酔してたんやねえ。ぐすッ。せったい聴きたいわあ。

作曲の背景には「社会の激変」も

春子 ベートーヴェンって、1770年に生まれて1827年に亡くなったんやねえ。



ウィーン中央墓地の(左から)ベートーヴェン、モーツァルト、シューベルトの墓

.....

秋子 モーツァルトは1791年没やからフランス革命(1789年)に遭遇はしたけど、その後の混乱は知らはへん。けどベートーヴェンは、ナポレオン戦争やフランス皇帝時代(1804~15)、それに続く社会の激変を身をもって体験し、生活の苦勞もすごく味わったんで、作品に浮き浮きするよな、また甘いメロディーとかは見当たらへん。それよりも、人間をグイと引っ張っていくよな、力強い激しい音楽を作りはった。

春子 人間の感情、苦悶とか愛といったものを表現しているんよ。それ以前は、そついったものを音楽で表現した人はいない！ なんか、ベートーヴェンの凄さが分かる気がするわ。

秋子 小山さんというと、2017年までの12年間、いずみホールで、「ピアノ・ロマンの旅」シリーズ全24回を開きはったんよ。

春子 そう。それで大阪市から市民表彰も受けてはんねん。

秋子 えっ、大阪の人やった？

春子 仙台生まれの盛岡育ちだけれど、大阪の音楽文化を盛り上げてくれたから表彰されたの！

音楽コンクールの最高峰、ショパン国際ピアノコンクールとチャイコフスキー国際コンクールの2つに入賞してはるのは、日本では小山さん一人。東北出身ということもあって、大震災の復興支援の演奏活動もしてはる。雑誌で連載をいくつか持っていて、プログラム解説も自分で書きはる。あ、ネコが大好きらしいわ。

秋子 めっちゃ、すごい人や。私もぜひ聴きに行かん！

● シリーズ第1回(6月23日)の聴きどころ

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第28番は1815年から16年にかけての作品。3楽章から成り、とくに第3楽章のソナタ形式に、「後期ソナタ作品」の特徴にもなっているフーガを用いている。「形式重視」の古典から「感情重視」のロマン主義への移行を示しているといわれる。

シューベルトのソナタ第13番は愛らしい旋律にあふれた作品で、シューベルトのピアノ・ソナタの中でも最も親しまれている1曲である。また、即興曲が2作品演奏される。いずれも歌曲集「冬の旅」と同じ頃に作曲された、ちょっと重々しい曲調だが、色彩的な和音の美しさはシューベルトならではだ。完成度も高く、物理学の天才、アインシュタインは「シューベルトがピアノで語った最後の言葉」「一つ一つがそのまま“小宇宙”をかたち造っている」と絶賛している、



これを知れば“新シリーズ”はもっと楽しめる ②

ピアノの改良をけしかけ、進化を促したベートーヴェン

ピアノという楽器が発明されたのは1709年といわれています。イタリアのチェンバロ製作者のクリストフォリによってです。その楽器はどんどん改良され、18世紀の末から19世紀にかけて飛躍的に進化します。これには、実はベートーヴェン(1770~1827) も大いにかかわっています。

ベートーヴェンはもともとピアニスト出身ですから、ピアノの性能が年を追って上がっていくことに強い関心を示しました。作曲家としても、楽器の音域が広がり響きが豊かになれば表現の可能性が高まるので、製作者に次々と注文をつけました。要望に応えようとヨーロッパ各地の楽器製作者も努力し、改良・開発機をベートーヴェンに競うように贈呈しています。それらのことがピアノの進化につながったのです。

ベートーヴェンは最新機種を試しつつ、ピアノ曲はもちろんのこと、交響曲などもピアノで作曲しました。とくに、ベートーヴェンが生涯にわたって作曲を続けたピアノ・ソナタには、それぞれの作曲の時に使った楽器の性能がよく反映されているといわれます。資料によると、ベートーヴェンが少年時代に使用したのは、



アウグスブルクのシュタイン製(1773年作だが使用は1787年頃)、ウィーンのワルター製(1780年頃作)などのピアノですが、これらが出せる音域は5オクターブでした。それが、改良の積み重ねによってだいに音域を広げ、第8番「悲愴」(1797年)の頃は5オクターブ+2度、第23番「熱情」(1804年)の頃には5オクターブ+5度、そして第26番「告別」(1810年)の頃には6オクターブに達しています。音域だけでなく、弦の張り方や音を発する機構などが工夫・改良され、音量や響きも豊かになりました。音域が広がるにつれ、ベートーヴェンが作る曲の音域もとに広がっています。

小山さんの「ベートーヴェン、そして…」シリーズで演奏される第28番以降の、いわゆる後期ピアノ・ソナタは、高まった楽器性能(とくに音域、音量)をフルに生かして作曲されたものです。なかでもシリーズ第2回に演奏される第29番は“ピアノで書いた交響曲”の異名があるほど、ケタ外れにスケールの大きなピアノ曲です。ベートーヴェンも楽譜に「ハンマークラヴィーアのための大ソナタ」と記したほどの自信作です(ハンマークラヴィーアはピアノのドイツ語表記、それで「ハンマークラヴィーア」と呼ばれるようになった)。ベートーヴェンにしてみれば、楽器性能が上がったからこうした曲を書いたのではなく、「自分の音楽を表現できるピアノがようやくできてきたわい」という心境だったに違いありません。

シリーズ(大阪公演)の参加者にすてきなプレゼント

小山実稚恵のピアノ・シリーズ「ベートーヴェン、そして…」(大阪公演)に5回以上参加していただいた方に小山さん直筆の「サイン色紙」を進呈します。また、「セット券」をお申し込みいただいた方、各回入場券の早期予約者の皆さんにも記念カード(検討中)をさしあげます。詳細は後日、発表します。